

お便り

2023(令和5)年 冬号
宮内 専念寺

じょやえ 除夜会

12月31日(日) 23:30~0:00

本堂で読経・ご法話の後、0時より除夜の鐘を撞きます。

ごしょうき 御正忌報恩講 2024(令和6)年

1月16日(火) 朝席10:00~12:00 → 軽食
昼席13:00~15:00

ご講師：高橋 仁誓 師(呉市倉橋町 得蔵寺)

ひがんえ 彼岸会

3月5日(火) 朝席10:00~12:00 → 軽食
昼席13:00~15:00

ご講師：辻 豊俊 師(呉市豊町大長 本徳寺)

春の総永代経法座

4月10日(水) 朝席10:00~12:00 → 軽食
昼席13:00~15:00

ご講師：寺西 龍珠 師(呉市川尻 真光寺)

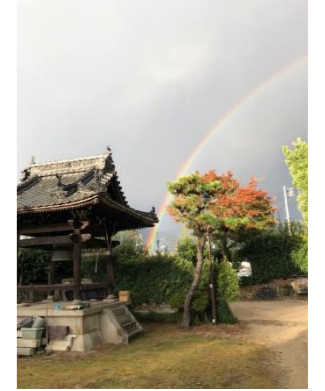
ごうたんえ 降誕会

5月16日(木) 朝席10:00~12:00 → 軽食
昼席13:00~15:00

ご講師：斯波 徹 師(安佐北区白木町 妙國寺)

仏婦連絡(月例会) 令和6年

1月16日(火)	御正忌に兼ねる
2月15日(木)	8:30~10:30
3月15日(金)	8:30~10:30
4月15日(月)	8:00~10:30
5月15日(水)	8:30~10:30



○納骨堂完成の記念法要勤修

12月1日(金)、建設委員・総代・仏教婦人会幹部役員・寺族・工事関係業者参列のもと、上記法要が勤まりました。

☆納骨堂ご利用希望の方は、寺に資料があります。

お尋ねください。(電話 0829-39-0826)

○専念寺の住所表示が変わりました。

変更後…廿日市市宮内三丁目10番23号

(変更前…廿日市市宮内1543番地)

○令和6年の本願寺出版の法語カレンダーを本堂に置いております。

ご入用の方は使って下さい。

○ハワイマウイ島大火災へ義援金を送りました。本願寺「たすけあい運動募金」を通して、本堂に設置しております募金箱より、46,334円送りました。

○本願寺団体参拝

コロナ禍により、しばらく休止しておりましたが、来年(令和6年)には実施の方向で計画しております。

ほうわ くぎょう しん しゅうじ
法話「恭敬の心に執持して」

ふじさわりょうしょう
藤澤 量 正 氏

いのちをかけて

数多くの名作を残した岡本かの子に

さくら花力いっぱい咲くからにいのちをかけてわが眺めたりという歌があります。作者は、さくらの花が力いっぱい咲いているのを眺めて、生きるということは生きることであり、それも、与えられた力いっぱいに生きることだと思ったのです。「いのちをかけてわが眺めたり」とは、いかにも大袈裟な表現だと思えますが、彼女はそのさくらの花を眺めながら、自分の人生をきびしくみつめたのでありましよう。

岡本かの子は、夫が漫画家の岡本一平であり、息子が画家の岡本太郎であるために、謂わば芸術一家と稱される家族に囲まれながら、その志す方向がそれぞれ異なっていたために常に煩悶を抱いていたようでありました。彼女は仏教研究者としても知られていたので、この歌はその頃の作品なのかも分かりません。後に、川端康成と知り合うようになって、小説を書き続け、『鶴は病みき』とか『老妓抄』『生々流転』『母子叙情』などを五十一歳で没するまで書き続けたのでした。そして、よく知られているように彼女は仏縁を得て

いづこへも我は行かましみほとけのみましたまはぬところなければという歌を残したのでありました。

思えば、私たちの歩む人生は、いつも平坦な道とは限りません。「苦の娑婆」と言われているだけに、さまざまな問題を背負いながら生きていかねばならないのです。それは、

『大無量寿経』に
人と 世間愛欲のなかにありて、
ひとり生れひとり死し、
ひとり去りひとり来る。
行に当りて苦楽の地に至り趣く。
身みづからこれを当くるに、
代るものあることなし。

と説かれているように、これが私たちの人生の実相なのです。

逼悩ということ

私たちは平穩無事に過ごしていても、社会構造が複雑なだけに、年齢を問わず孤独にさいなまされることが少なくないのです。人間はまことにか弱いもので、ともすれば環境に順応できず、「逼悩」とうことばがあるようにまわりの状況によって無理矢理に苦悩のるつぽに放り込まれることがあります。それは、肉親との別れや、病気の苦しみだけではなく、生きる方向がつかめないために挫折を余儀なくされることが少なくないのです。この平和で豊かな日本のなかで、年間三万人を越す自殺者が何年も続いている現状をみると、まさに「人はパンのみによって生くるにあらず」の思いが強くなります。

だからこそ人間が居るところには必ず宗教が存在するのでありましよう。それは原始社会でも近代文明が爛熟した現代社会であっても全く変りはありません。ただ人間の愚かさは、自らの欲望を満たすために神々を利用したり、中には自ら信ずる宗教以外は徹底的に排除するというような過激なものがあるのも事実です。しかし本来宗教というものは、煩惱のしがらみにくくられている人間そのものを救うものであるべきです。それ故にこそドイツの宗教哲学者シュライエルマハーが「宗教心とは絶対依憑の感情である」と述べたのであって、このことはどの宗教に於いても、絶対者にひたすら帰依信順するということは極めて大切なことなのです。

著名な作家で文化勲章も得た遠藤周作は、晩年入退院を繰り返していただけに、生と死について語った文章がかなり残されていますが、彼はカソリック信者でありながら、「南無阿弥陀仏は阿弥陀如来にすべてを委ねたてまつるということであろう」と述べています。これも傾聴に値することばだと思います。

親鸞聖人は、信を得る身になれば「正定聚に住す」と示されました。間違いなく仏に成ることに定まるといことは、どのような状況にあっても、うろたえることなく、まして迷いの世界に流転することのない身になるのだからこそ「不退転」とお示しいただきました。聖人が八十八歳のときに乗信房にあてられたお手紙に

信心の定まらぬ人は正定聚に住したまはずして、うかれたまひたる人なり。

という一節があります。「信心の定まらぬ人」は、さまよっている人、うかれたままで人生を過ごす人であると言うのです。どのような状況のなかでも、退転することなく、迷いの世界をうろつくことのない人生こそ、救われた人生であり、生ききった人生であると言えるのです。

大事なものは何か

鈴木章子さんの『癌告知のあとで』という書物は、二十年近く経った今も読者に深い感動を与えています。乳癌から両肺に癌が転移し、最後には脳までも冒されながら、法悦の詩を書き続けた鈴木さんは、四十七歳の短い人生を立派に生ききった人でありました。その書物のなかに「この生」という詩があります。さり気ないことばですが、深い信のよろこびと大きな力に恵まれたことの安らぎが感じられます。

仏様のおことばがわかる　今の生いただきまして　ありがとうございます
仏法をお聴かせいただく身に　させていただきまして　ありがとうございます
お念仏をいただくことができまして　ありがとうございます
喜んで　この生　終わらせていただきます

この詩は亡くなる三ヶ月前に書かれたものですが、力いっぱい生きて、すべてを如来さまにまかせきった作者のさわやかな姿が彷彿と目に浮かぶようです。

親鸞聖人は『高僧和讃』のなかで
不退のくらゐすみやかに　えんとおもはんひとはみな
恭敬の心に執持して　弥陀の名号称すべし

と詠われました。私たちにとって大事なことは、つつしみうやまう気持ちを忘れず、何よりも先ず他力の信を得ることだと示されたのです。それには、文句なしに頭の下がる心を持ち続けることです。執は〈執われる〉ということで心が少しも他へ動かないことです。持は〈たもつ〉ということ、散らばらない、失せないという意味です。聖人は如来の大悲を仰いで片時もその思いが崩れぬことを「恭敬の心に執持して」と述べられたのでした。そこから出てくる称名こそが報謝の念仏となるのです。

私たちは、念仏者として、親鸞聖人によって開顕された如来の真実をまちがいなく聞きひらき、浄土真宗にとっては最も大切な御仏事である「報恩講」のご縁に遇うことによって、自らの人生の歩みを確かにしたいものです。